コリント人への手紙第一 3 章 10-17 節「神の宮である教会を壊すなら」

小池 宏明 牧師

今日の箇所では「神の宮」であり「教会」という「信徒の群れ」を整えることを建築に例えている。パウロは、コリントの信徒たちが、主なる神様のみに信頼して生きることができるように賢く土台造りに励んだ。(10 節) ところが、パウロの後に来た教師たちとその教師たちに影響を受けた信徒たちは、パウロの働きを否定しながら互いに対立するようになった。パウロは、このような動きを注意喚起している。

＊キリスト以外の土台はない

11 節「**だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。**」パウロは、2 章で「十字架につけられたキリスト以外は知らないことに決めた」とまで言い、人間の知恵に頼ることなく、神の知恵である福音を、そしてその中心であるイエス・キリストを、土台に据えた。これは、パウロに与えられた神の恵みによる。教会の土台はもともとイエス・キリストであり、他の土台を据えることは決してできない。

＊土台の上に残る働きを

教会をキリストという土台にどのように形成していくのかが問われている。12-13 節「**だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。**」火災の時に燃えにくい材料 (金、銀、宝石) と燃えやすい材料 (木、草、藁) が対比されている。「その日」とは、世の終わりに主イエス様が再臨される時のこと。審判の火で燃えてしまう働きは、人間的な好みや感覚、あるいは、他人の要望に囚われて振り回されるような働きのこと。反対に、審判の火に耐える働きは、神様の御心に適い、主イエス・キリストによって罪赦された感謝の現われとして、始められていく働きのことで、残って行く働きだ。福音を信じた信徒たちは救い出されているので、たとえ、教会生活で良い働きをすることが出来なかった (例えば派閥を作って争ってしまった) としても、辛うじて、火の中をくぐり抜けるようにして助かる。(14-15 節) これは、主の憐れみ以外の何ものでもない。まだ信仰告白に至っていない方々は、なるべく早く主の憐れみを受け取っていただきたい。いつ終わりの日が来るのか分からないので、すぐに備えて欲しいと切に願うのだ。

教会は、救い主イエス・キリストを土台にして、その上で、私たち一人ひとりが成長して、朽ちることのない永遠に続く働きを残していきたい。